

わたしたちの物語

～主人との生活で大切にしていること～

畑野幸子さん（85才）＆聞き手 滝本徹男

生まれは、赤羽の志茂です。

三、四歳の時に、宇都宮の県庁のそばに強制疎開しました。その県庁のそばで泳いだりして楽しかったことを覚えてます。

その宇都宮も昭和二十年の空襲でやられたんです。

その空襲の時に、十二歳違いの姉が末っ子の私の手を引いて必死になって山の上に連れてってくれました。

真っ暗なところに人がいっぱいいたんですけど

花火みたいな形でパラパラパラ落ちてくるので

まだ小さかった私は綺麗って言うてしまい、姉が一生懸命抑えてた。

あと、家の前の県庁から火がどんどん出てきて、防空頭巾をかぶって逃げた風景。

学校も、大人がみんな出て一生懸命に廊下を壊してピアノの部屋だけを助けたんです。私は防空壕にいたんですが、その横にも落ちました。

戦争の記憶はそれぐらいしかないんですけどね。

戦争が終わって昭和二十四年頃、小学校三年生で戻ってきて

西ヶ原小学校に入ったんです。よく外で遊んでました。

遊びは、ガラガラの原っぱで兄と兄のグループとかと一緒に

水雷艦長といったゲームをやったり、缶蹴りで遊んだり。

綺麗なタイルや、釘を拾ってバケツいっぱいにして持っていくと

十円くれるというのもありました。

小中高と大学を出ても、ずっと住んでたのは西ヶ原。

大学を出て、日本画集や世界美術館の全集の編集や史学会の運営をする仕事を三年ほどしました。仕事は楽しく、苦労はなかったですね。

結婚は会社の同僚だった主人と。

荒川区にちょっと居た後、主人が以前住んでいた名主の滝の近所に転居。

近くにちんちん電車が通ってたんですけど、十年ぐらい前になくなったり、

新しい道ができたりと、当時と比べて周囲は大きく変わりました。

子供は二人いますが、近くにいる次男夫婦とも共稼ぎで帰りが遅いので、

孫は週三日ぐらい夕飯を食べにきて、帰りなさいって言うまでいますね。

民生委員を十二年間しましたが、いろいろ苦勞がありました。

地震があった時、高齢の一人暮らしの人たちにそれぞれ電話したんです。そしたら皆さんすごく喜んでくださって。

またある時、夜中に、救急車を巻き込んだ認知症騒ぎに対処したり。

また、暑い夏の夜、親に何回も電話しても出ないとの息子さんからの連絡。

訪問したら洋服も脱いでベッドの外でドタツと寝ていて。

急いで救急車を呼んで助かりましたけど、熱中症でした。

元々、心配性だから、私は民生委員にちょっと向かないなど、その時思いました。

夫婦二人とも元気で暮らしていますが、主人は主人で、私は私で、お互いの趣味でそれぞれ楽しく過ごしています。

主人は、ほとんど一日中 本を読んでいるので、

食事の時しか会話を交わさないような感じもあるんですけど、

新聞などを参考に買い物に行き食事を作ってくれます。

洗い物は私ですけどね。

料理をするって、ボケないためにも本当にいいことだと思います。

皆さんにもおすすめてですね。

私の趣味の一つはスポーツを見ることで、

今日もテレビで大谷選手の活躍を観てきました。

また、絵を描くのが好きですけど、絵の具を買いに行くのも大変になってきて。

今は、町会でオカリナをやってるんですね。

ともかく、人が好き、人と会話とかをするのが好きですね。

主人との生活で思っていることは、「やりたいことをやる。

皆に迷惑をかけないで、相互に尊重しあう。」ということですね。

令和7年11月14日